

修飾属性の指示が幼児の新奇形容詞の利用場面拡張に及ぼす効果

○藤木大介*・樟本千里**・小津草太郎*・山崎 晃*

(*広島大学大学院教育学研究科, **川崎医療短期大学医療保育科)

形容詞の獲得研究では、新奇な形容詞を他の場面に拡張して利用可能かを調べ、獲得能力の有無を検討している。例えば、Klibanoff & Waxman (2000), Waxman & Markow (1998)は、形容詞の拡張に名詞の基礎レベルカテゴリが影響することを示した。具体的には、デコボコの付いた馬の玩具(ターゲット対象)に対し、新奇な形容詞を用いて「これは blickish な馬です」と教示し、2つのテスト対象(デコボコな馬とツルツルな馬)の内どちらが blickish な馬であるか尋ねた。その結果、2～4歳児でデコボコな馬を選択することができたが、ターゲット対象の基礎レベルカテゴリが馬からサイに変わると2～3歳児ではデコボコな馬を選択できなくなった。これは、基礎レベルカテゴリと新奇形容詞の属性という2つの次元の比較が必要になったためだと解釈された。

しかし、これにより何が困難になったかは明確に述べられていない。本研究では、形容詞が名詞のどの属性を指示するのかが特定できなくなったためであると考えた。そうであるならば、「色」赤い花」と属性を指示することで、基礎レベルカテゴリにかかわらず、正しい選択が可能となると考えられる。

方法

実験計画 3(属性指示)×2(基礎レベルカテゴリ)の2要因計画で、共に被験者間要因であった。属性指示要因は、属性指示無し条件、属性指示有り条件、統制条件の条件を設けた。基礎レベルカテゴリ要因は、基礎内条件と基礎間条件の条件を設けた。

刺激 対象物として、線画に模様、色、手触りの属性を付与したものをを用いた。模様は線画上に丸形と星形のスパンコールを貼り付けることで与えた。色は線画に光沢のある色紙と光沢のない色紙を貼り付けることで与えた。手触りは線画にフェルト生地とサテン生地を貼り付けることで与えた。新奇形容詞は、「オヌな」、「ワモな」、「ヘクな」を用いた。

手続き はじめに、手人形(ゴギという名前)は日本語がうまく話せないと説明した。属性指示有り/基礎内条件においては、まず、ターゲット対象(光る象)を示し、「ゴギは、これをとても‘色’オヌな象だと言います。」と教示した。そして、2つのテスト対象(光る象と光らない象)を机の上に示し、「ゴ

ギにもう1つの‘色’オヌな象を渡してあげられますか。」と尋ね、一方を選択するように求めた。これに対し、属性指示有り/基礎間条件ではターゲット対象とテスト対象の基礎レベルカテゴリが異なった。また、属性指示無し条件では、‘色’といった属性指示語が加えられなかった。さらに、統制条件では、新奇な形容詞も付与されなかった。このような手続きで12試行実施した。

参加者 幼児58名(平均月齢51ヶ月)であった。

結果と考察

各条件の平均正答率は図1のようになった。実験計画に基づく分散分析の結果、属性指示要因の主効果が有意傾向であった($F_{(2, 52)} = 2.58, p < .10$)。傾向差にとどまったが、予測を確かめるために下位検定として多重比較(LSD法)を行った。その結果、属性指示有り条件と属性指示無し条件との間に10%水準で傾向差が認められた。また、属性指示有り条件と統制条件との間で5%水準で有意差が認められた。したがって、属性指示有り条件が他の2条件と比較して正答率が高いことがうかがえる。属性指示語を加えたことで新奇形容詞が修飾する属性が明確となり、正答率が高くなったと考えられる。

引用文献

Klibanoff, R. S., & Waxman, S. R. (2000). Basic level object categories support the acquisition of novel adjectives: Evidence from preschool-aged children. *Child Development, 71*, 649-659.

Waxman, S. R., & Markow, D. B. (1998). Object properties and object kind: Twenty-one-month-old infants' extension of novel adjectives. *Child Development, 69*, 1313-1329.

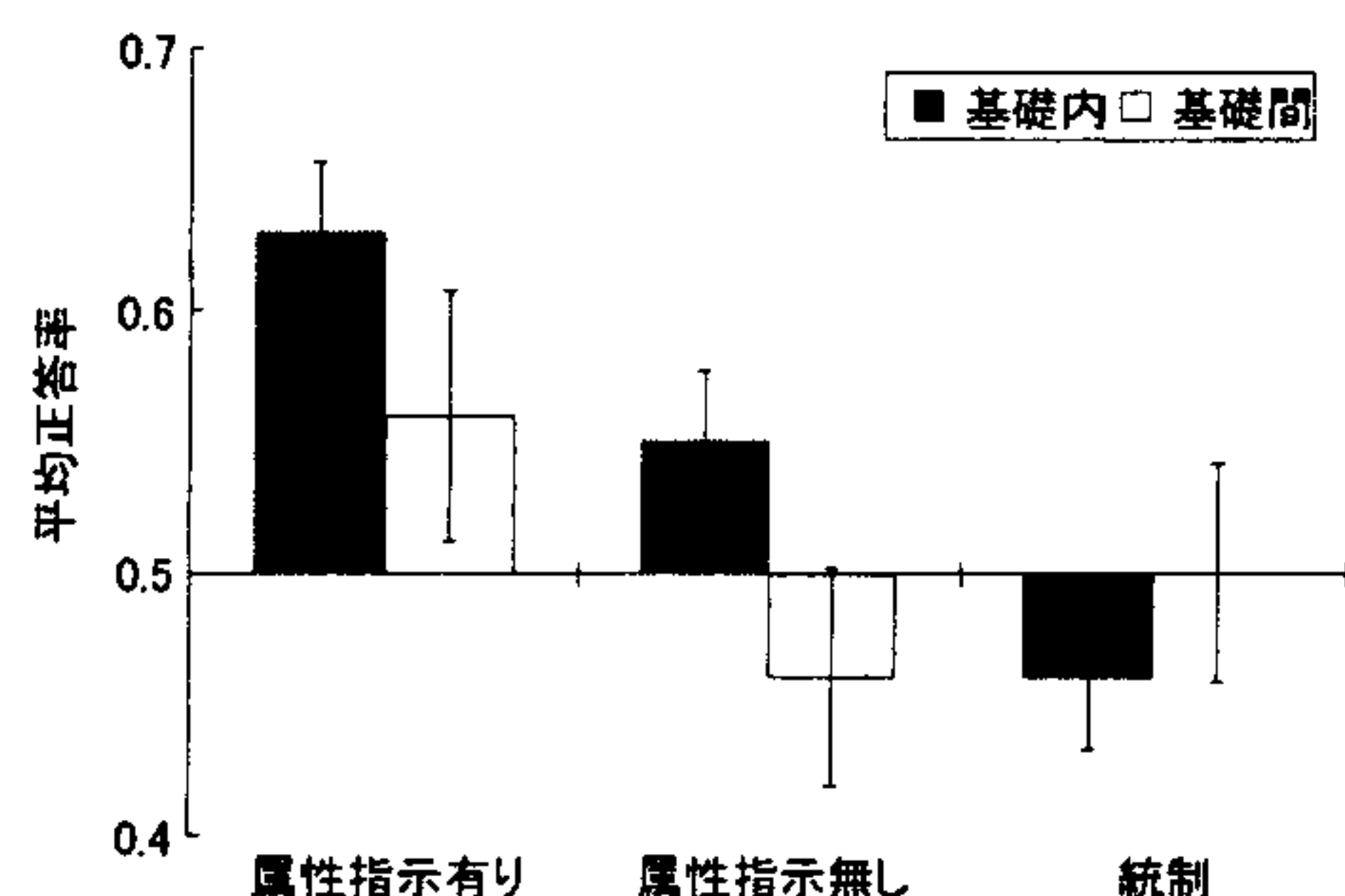


図1 各群の平均正答率(誤差線は標準誤差)